

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン 総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第2章 地域格差①

大阪森ノ宮成人病センターに入院した時の出来事だ。こんな言葉から始まった。何のことは分からず確認してみた。
「あなたの住む益田市と益田市と大阪成人病センターとは相互の契約が必要だったのだ。当病院にとっ

格差のツケ 患者が払う

医療

て、私が益田市から初めて入院してすぐに益田市と病院を繋ぐ役目が私の仕事となった。

1) 手術の格差
私の場合はこうだった。手術数日前のこと。それは、インフォームド・コンセントの際に起きた。

A) 代用膀胱、B) 回腸導管、C) 皮膚ろうの3種類
どれにしましょうか？
私はAをお勧めしますと医師は言った。
普通はすぐに先生にお任せしますと返事をする。ところが、私は何となく返事を保留した。とくに意味はなかった。
何かの知らせだったのだろうか？ 気持ちがそうさせた。

翌日、益田赤十字病院に電話した。
症例数を聞きたかったからだ。
案の定Aは0、Bは年1例ほど、Cは0という返答。そこで思った。
症例数0の手術をして帰ることは、万一のとき、どうする？
救急車で何処まで行ったら良いんだろう。結局Bの手術を選んだ。この手術をすれば身体障害者となる。そんな馬鹿な…
自分で選んだ道。医療の格差、その地域格差のツケを、私が受けるなんて…
これが、がんサロン開設の動機の一つとなった。

2) 抗がん剤の格差
未承認薬の話は皆さんご存知でしょう。
外国で使用できている薬が日本では使えない薬が沢山あることを。
そのほかにまだあるんです。厚生労働省で承認された薬が国内で同時期に使われて居ない現実が。
都会の病院では承認後はすぐに使えます。しかし、地方では安全を確保するため猶予期間を置き様子を見ます。そして、1年遅れで使います。
患者が新薬を早く使いたいと思うのは当然でしょう。それが地域によって格差があるんです。均等に出ていないんです。
がんは部位によっては新薬の種類が非常に少ないが、あるのに…
なのに様子を見てから使います。これが現状です。なんとかしらないと…

(2)へ続く